



西小校長室だより

令和7年度 10月号

(文責 妹尾)

運動会の意義

9月27日(土)に運動会を実施しました。異常な暑さが続く最近の夏にあって、9月に開催するこの運動会は、熱中症など体調面において大変心配していました。しかし当日は曇天、前日の雨もすっかり上がり、ある意味絶好の運動会日和となりました。

子どもたちの中には運動が得意な人もいれば、そうでない人も当然います。また競技には勝ち負けが存在し、順位もつきます。敢えて学校で運動会をやる意義はどこにあるのかと問われたら、勝ちに向かって諦めない



で頑張る経験を得ることだと私は答えるでしょう。この運動会でも、ひたむきで懸命な子どもたち一人一人の表情を見ることができ、「やっぱり運動会っていいな」と感動がこみ上げてきました。応援合戦においては、夏休み明けから各色の6年生が休み時間も返上しながら計6回の色別集会を計画し、下学年を引っ張り練習してきました。本番はどの色も見応えのある素晴らしいパフォーマンスを発表し、観客からも大きな拍手をもらいました。



1位を取ったり、転んでしまったり、勝ったり負けたり、悲喜こももですが、6年生がちゃんとヒーロー・ヒロインになり、下学年が6年生にあこがれたであろう素敵な運動会になったと思います。

小さな記者たちの奮闘

10月2日(木)に3年生が社会科見学に出かけました。見学先はAコープと永井隆記念館です。Aコープでは精肉などを貯蔵する冷凍室に入り、零下20数度における貯蔵のしくみと、零下の世界は思った以上に寒すぎる



ことを自分の体で感じ取っていたようです。また、買い物にいられているお客様にインタビューを試みるも、答えてくださるか心配でなかなか声が掛けられず、何周も通路を回っていた人もいたようです。永井隆記念館では、館長さんから説明を聞き、如己堂や展示室で博士の生涯や功績などについて

【※西小ホームページのアーカイブを抜粋・加筆しています】

見て回りました。「平和」と「如己愛人」の精神で世界平和を訴え続けた永井博士が幼少期を過ごした雲南省で生活する者として、その功績の一端を知ることができた有意義な学習になったと思います。



いわくまの森遊具の修繕終了

休み時間には子どもたちが意気揚々と出かけ、汗を流しながら運動したり生き物を観察したりして遊べるアスレチックフィールドがいわくまの森です。今から44年前に完成し、増設・改修をしながら今日に至るまで子どもたちのお気に入りスペースになっています。本校を卒業された保護者の皆さんもきっとこの場所でたくさんの思い出を作ったのではないかと拝察いたします。しかし近年は、経年による遊具の劣化で、安全性を確保できず使用不可になっているものもいくつかありました。そこでこの度、PTAが主体となり、遊具の修繕をしていただきました。創設にも携わられた木村さん(木村建築)に状況を見ていただき、3名の皆さんで木材・ロープの交換やワイヤーの張り直しなどをしてもらい、10月2日に修繕が終了しました。より安全になった新たないわくまの森に、これからもずっと子どもたちの楽しそうな声がこだますることと思います。



なお、修繕費はいわくま修繕積立金、空き缶回収費から支出しておりますので、取り急ぎご報告いたします。

いのちの楽習

10月7日(火)に2年生が「バースデープロジェクト～いのちの楽習出前講座～」と題した授業を行いました。島根県助産師会のお二人をお招きし、「誕生日ってなに！」という題材で自分の命の大切さや家族とのつながり、かけがえのない自分や友だちの存在などについて考え



ました。助産師の仕事について話をされた後、誕生日はどのような日なのか、その意味合いについて紙芝居も使って話していただきました。そして子どもたちは、お腹の

中の胎児の心音、児童の心音を聞きながら、今生きている実感や生まれる前からすでに命が始まっていることへの驚きを感じているようでした。また助産師の模擬出産シーンでは「がんばれー」と励ます子どもたちの声が響きました。学習の最後には、身長や体重がリアルな赤ちゃん人形を一人一人が抱っこしてみました。みんな腕の中に「新たに生まれた命」を抱きながら何を感じたのでしょうか。とても貴重な学びとなりました。



市陸上大会に参加して

10月9日(木)、多少風が強かったものの、過ごしやすい秋晴れのもと、大東ふれあい運動場(陸上競技場)を会場に第21回雲南市小学校陸上競技大会が開催されました。西小の6年生たちも元気に参加しました。種目としては



800m、1000m・100m(オープン含む)・走り幅跳び・ジャベリックボール投・4×100mRの競技に分かれ、全員がこれまで練習してきた成果を出し切るべく自己新記録を目指して挑みました。みんな一位を目標に頑張るわけですが、一等賞をとるなんて、そうそうできることではありません。ただ、それと同じくらい価値があることは、尋常ではないくらい緊張している自分自身の心に喝を入れ、「最後までやり切るんだ」と己の弱い気持ちと闘うことです。みんな見事に自分に打ち勝ち、最後まで全力で挑んでいました。思うように記録が出た人、そうでなかった人、いろいろだと思いますが、前日の壮行式での全校のみんなの思いにしっかり応えることができていたと思います。最後の種目のリレーでは、テント内が一丸となり、応援も最大級の盛り上がりでした。



校長所感 ~固定観念~

私たちの日常生活には「～ねばならない」「そうしたものだ」というように、習慣や言い伝え、自分の感覚など様々な形で『それ常識です!』と決めつけていることが意外に多くないでしょうか。学校や保育園などで子どもが泣いていたら「かわいそう」と大人が勝手に捉え、すぐに援助することも然りです。必死に頑張っている涙や気持ちを整理している涙もあるはずなのに…。(このことについては、また別の号で話したいと思います) 一方、多様性という言葉が浸透し、性的マイノリティに関することや、性別による職業種、女人禁制などのように差別に関する意識は、これまでの常識がかなり覆ってきました。ここでは、あいさつに関する「常識」について考えてみようと思います。



「明るいあいさつ」「進んであいさつ」といったキャッチフレーズは津々浦々で聞かれます。また、全国どの学校でもあいさつを推進しないところはないでしょう。それは社会生活において、あいさつは必要なものだとも誰もが認識しているからです。しかし、その**価値観**については**人により、また場所によりそれぞれ異なる**のではないかと私は考えます。では私たちがあいさつをする意義はどこにあるのでしょうか。



新しい環境に入るとき、あいさつは人間関係の基本となり、礼儀として以上の意味を持ちます。あいさつが社会人としての最低限のマナーとよく言われるのは、**あいさつそのものが関係性をつくるアイテム**だからに他なりません。「はじめまして」「よろしくお願いします」「いいお天気ですね」などのあいさつは、コミュニケーションを始めるきっかけとなるあいさつであり、言葉を交わすことで親しくなろうという意思が含まれています。

ある文献によると、**日本人**は互いの関係性を作り出すために、**親密度を深める言葉を重要視**するのに対し、**情報を伝える言葉を優先する諸外国**の人は、何のための言葉(あいさつ)なのか全く理解できないことが多いそうです。例えば「いただきます」「ごちそうさま」は、自分で買ったり料理して作ったりした食事なのに、誰にお礼を言うのか、誰にあいさつするのか分からないというのがその理由です。もちろん日本では、食事の提供者や調理に関わった人への感謝、食材の全ての命に対する感謝を込め、幼い頃から当然のように手を合わせてきました。

したがって、私たちが常識とするあいさつパターンは、私たちににとっては不可欠のコミュニケーションツールに違いありませんが、**世の中の全ての人のマストツールではない**のです。みんなと声を揃えてあいさつできなくても、決まった言葉のあいさつでなくても、食事の後に手を合わせないことがあっても、**対象の人や物・事に気持ちをしっかり込めた自分なりのあいさつ**ができればよいのだと思います。大切なのは、その意義を自分の中でどのように見出し、**価値づけるのか**ということだと思います。、日本文化を尊重しようとする姿勢も当然重要です。

1つ、昨今のコミュニケーションの取り方について若干の懸念があります。現在は年齢に関係なく他人との関係づくりの主流が LINE やインスタグラム、ツイッターのようなSNSになりつつあります。顔が見えず、自分のタイミングで発信できる利便性は非常に大きいと思いますが、現実の生活では目と目を合わせ、言葉を交わす中で暮らしています。直接的なコミュニケーションを避けてばかりいると、相手との適切な距離感がわからないまま、無機質な人間関係に終始しそうな気がするのです。どんなあいさつをする人でありたいか、決めるのも実行するのも自分自身なのです。

学校のホームページの「児童の様子」を日々更新し、子どもたちの様子をお伝えしています。どうぞご覧ください。